
大矢 おおや

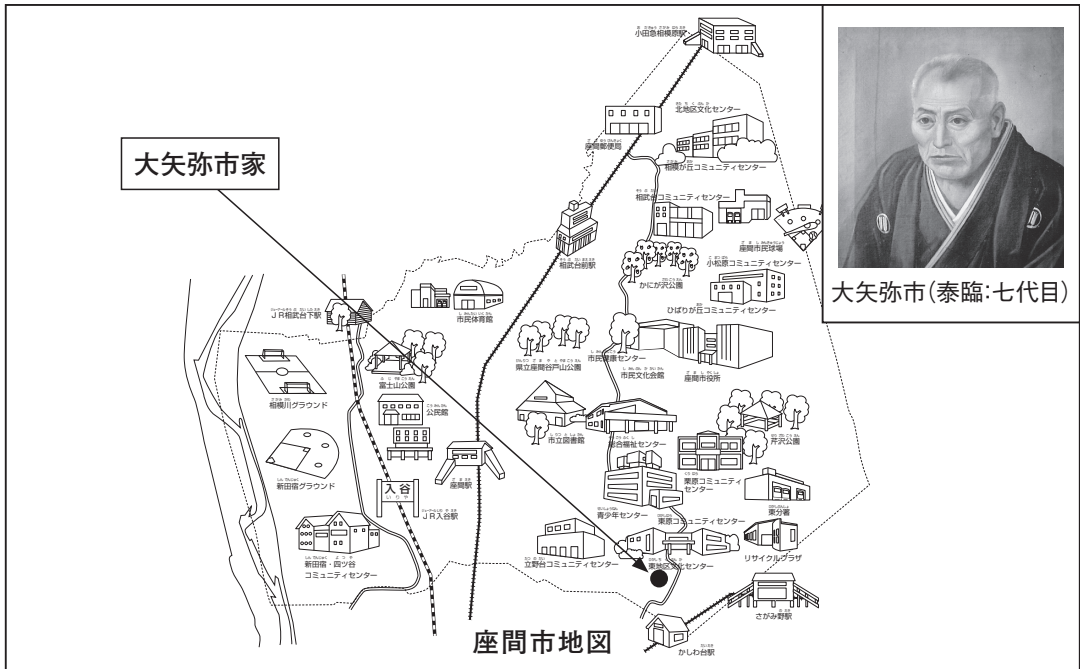
弥市 やいち

弥市、黒船を見て学校を作る

絵 文

有山 ありやま 浅野 あさの

周一 しゅういち 寛 かん



大矢弥市(泰臨:七代目)

大矢弥市家

座間市地図

| 西暦 | 和暦 | 年齢 | できごと | 時代背景 |
|-------|--------|-----|--|------------------------------------|
| 一八〇四年 | 文化元年 | 0歳 | 五代目大矢弥市生まれる。 | 一八五四 日米親条約が結ばれ鎖国 |
| 一八三四年 | 天保五年 | 0歳 | 七代目大矢弥市生まれる。 | 一八五九日米修好条約が結ばれる |
| 一八五〇年 | 嘉永三年 | 46歳 | 五代目、浦賀に米仲買の店を出す。 | 一八五九日米修好条約により横浜港他が開港、他の外国とも貿易が始まる。 |
| 一八五一年 | 嘉永四年 | 47歳 | 五代目の御開米などの寄付が浦賀奉行所に許される。 | |
| 一八五三年 | 嘉永六年 | 49歳 | 六月、ペリー来航。五代目、御開米を警備の武士に配る。 | 一八五三六月、ペリー、軍艦を率い浦賀沖に来航。 |
| 一八五四年 | 安政元年 | 50歳 | 七代目、江戸の至誠堂で勉学に励む。 | 一八五四 日米親条約が結ばれ鎖国 |
| | | 19歳 | 一月、ペリー再来航。五代目、御開米を警備の武士に配る。が終わり、下田、函館の二港が開港。 | 一八五九日米修好条約が結ばれる |
| 一八六一年 | 文久元年 | 57歳 | 五代目、亡くなる。 | 一八六〇 桜田門外の変、井伊直弼 |
| 一八六二年 | 文久二年 | 28歳 | 栗原村に郷学校 誠志館が開校。 | 水戸藩浪士に暗殺される。 |
| 一八六九年 | 明治二年 | 35歳 | 協同学舎として郷学校再開。 | 一八六八 江戸城無血開城、改元し明治となる。 |
| 一八七二年 | 明治五年 | 38歳 | 学制発布により協同学舎、廃校となる。 | 一八七二 学制発布、近代教育がはじまる。 |
| 一八七三年 | 明治六年 | 39歳 | 協同学舎、小学校となる。 | |
| 一八七七年 | 明治十年 | 43歳 | 栗原学校に校名変更 | |
| 一八七九年 | 明治十二年 | 45歳 | 洋風校舎が専福寺境内に完成。 | 一九四五 第二次世界大戦終わる |
| 一九一三年 | 大正二年 | 79歳 | 七代目、亡くなる。 | 一九四八 座間町、相模原町から独立。 |
| 一九五〇年 | 昭和二十五年 | | 座間小学校から独立、座間町立第二小学校として現在地の新築校舎に移転。 | |
| 一九七三年 | 昭和四八年 | | 校名が座間市立栗原学校となる。 | |

【文・絵 作者紹介】

浅野寛は座間市教育委員会教育研究所に勤務し、大矢弥市に関する資料を調べ、今回の文章を執筆した。有山周一は元座間市内小学校の校長で、挿絵を担当した。

江戸時代の終わり、巨大な軍艦が江戸に近い三浦半島の浦賀沖にやって来
ました。

軍艦は真っ黒に塗られ、たくさんの大砲を備えていたので、人々は「黒船」
と呼んで恐れ、日本中が大騒ぎになりました。それから、日本の政治や社会
は大きな変化をとげ、明治維新を迎えることになります。

そんな中で、栗原村（座間市栗原地区）の大矢弥市は、「誠志館せいしかん」という郷ごう
学校がっこうを開こうとしました。なぜでしょうか。

大矢家の成り立ち

大矢家は、栗原村で、古くから米や麦などをたくさん作っていました。や
がて、広い地域の農産物を扱う商売を行うようになりました。

大矢家の当主は、代々「弥市」という名前を名乗り、五代目の弥市は「豪
富第一栗原村大矢弥市、おおよそ十八万両の富」とうわさされ、有力大名に

郷学校

江戸時代の郷学校は、藩
主や地方の有力者などに
よって各地に作られまし
た。ここでは、教師が寺
子屋で学ぶ内容よりもや
や高いレベルの漢字・歴
史などを教え、若者たち
に道徳的な内容を含めて
指導しました。

十八万両

一石（玄米一五〇粒）
を一両とし、現在のの
座間の米「ひまわり」
一石六万三千一八〇
円（平成三十年調
査）で換算すると約
百十三億七千二四〇万円
になります。



現在の浦賀港

お金を貸すほどになりました。また、息子たちを江戸の塾「至誠堂」^{しせいどう}に行かせるほど教育熱心でした。

江戸時代の後期、江戸湾（東京湾）の入り口にある浦賀は、日本各地の物資が船で運ばれ、にぎわっていました。そんな浦賀で、弥市は嘉永三年（1850年）から、米の仲買商を始めて大きな利益を得ました。

浦賀には、交易の管理と警備のために奉行所が置かれていました。幕末になると江戸湾に近づく異国船が増えたので、幕府は警備を拡大しました。

そこで弥市は、非常時のための米「御囲米」^{おかこいまい}と、それを蓄える蔵、警備にあたる軍船などの費用を寄付したいと奉行所に申し出ました。すると、奉行所はそれを許し、「奇特な者」として、武士の身分を与え「御囲米」の管理も

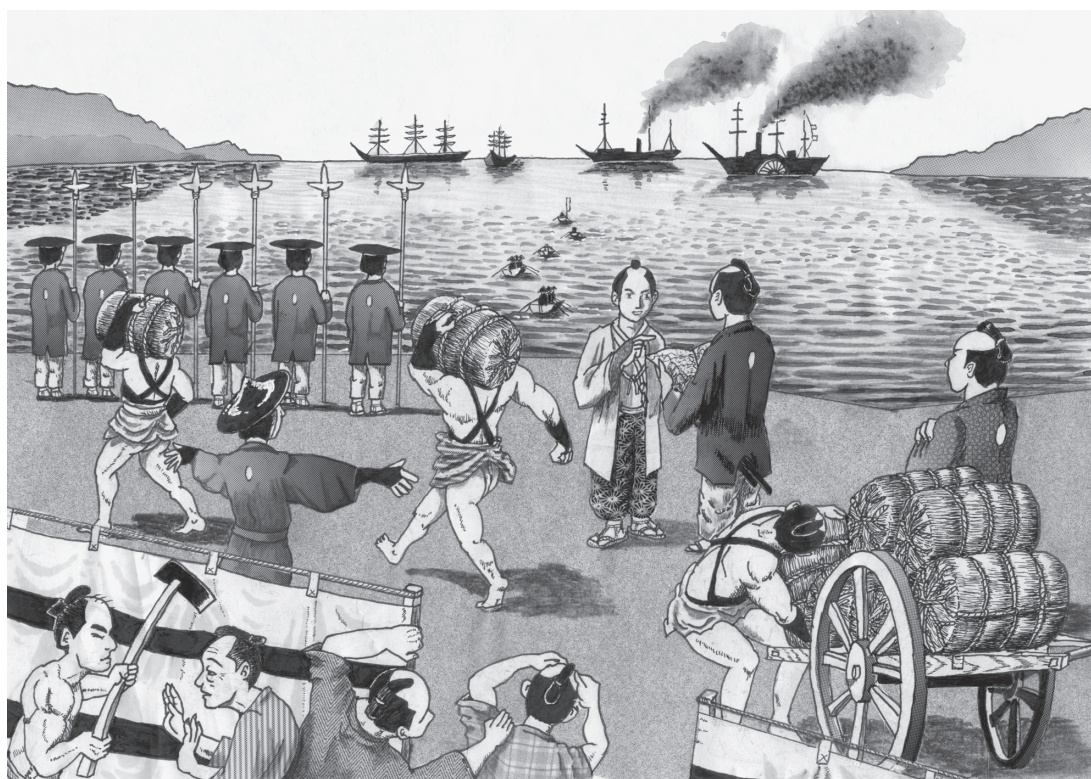
浦賀
現在の神奈川県横須賀市

異国船

外国船のこと。浦賀にはペリー以前の文政元年（1818年）から嘉永二年（1849年）に、イギリスの測量船マリナー号などが五回来航しています。

奇特な者

ここでは幕府に特別な寄付をした人や、前例のない善行などのほめられるべき事を行った人をさします。



まかせました。

黒船が来た

嘉永六年（1853年）六月、

浦賀沖に、アメリカのペリーが

率いる四隻（蒸気船二隻、帆船

二隻）の真っ黒い軍艦「黒船」

が現れました。浦賀の海岸には、

奉行所をはじめ各藩の武士たち

が勢ぞろいし、見物人も集まり

大騒ぎでした。弥市も栗原村か

らいそいで駆けつけ、貯えてお

いた千俵の「御困米」を警備に

黒船と千石船

黒船の「サスケハナ号」

（蒸気船）は七八、三

び、当時の千石船（全長

約二九び位）と比べると

約二、七倍の大きさでし

た。

千俵

約六トン。家庭用一〇び

のお米で六百び分。

あたる武士たちの食糧としました。

弥市は黒船や集まった人々を見つめながら「これから、日本はどう変わって行くのだろう。」と不安な思いを胸にいただきました。

このとき、ペリーはアメリカ合衆国大統領からの国書を、久里浜で幕府に渡し、開国するように迫りました。翌年一月、再び九隻の軍艦を率いて現れたペリーの要請に応じ、幕府は、三月に「日米和親条約」を結びました。ついに、二百年以上にわたった鎖国が終わり、日本が開国したのです。

さらに四年後の安政五年（1858年）、幕府はアメリカとの間に、「日米修好通商条約」を結びました。翌年には函館、横浜、長崎の三港を開港し、他の国とも貿易を行いました。特に、江戸に近い横浜は輸出向け生糸が各地から集まり、にぎわうようになりました。

開国後の混乱

日米和親条約
難破したアメリカの船の救助や、薪・水、食料の補給だけを認めるというもので、下田、函館の二港が開港し、二百年以上にわたる鎖国が終わりました。

日米修好通商条約
安政五年（1858年）締結、翌年に函館、横浜、長崎の三港が開港、後に神戸、新潟の二港が整備され開港。同様の条約が他国とも結ばれました。

ところが、幕府の方針に反対し、外国人を追い払い、鎖国を続けるべきだとする「攘夷派」の活動が盛んになっていきました。そして攘夷派の武士たちは横浜の周辺で外国人をたびたび襲ったのです。

国内の旅人たちは、横浜を通る東海道をさけて、安全な矢倉沢往還を通るようになり、街道沿いの宿場や村々も賑わうようになりました。ところが、そこでは、取り締まる役人が少ないためか、博奕打ちが入りこみ、治安や風紀は大いに乱れ、強盗事件も増えました。

弥市は、江戸や浦賀の行き帰りのたびに、宿場の雰囲気急速に悪くなっていることに気づきました。弥市は、栗原村の名主から、村の若者の中に、近くの宿場などで博奕をするものがあることを聞きました。そして、「このままでは、若者たちはまじめに働かなくなり村がすたれていく。」と悩んだのです。

実は、弥市の息子たちが学んだ江戸の塾「至誠堂」では、日尾荆山が、「実

矢倉沢往還

都内では「青山街道」、神奈川県内では「大山街道」とも言う。国道二四六号線の旧道。都内港区青山から、市内ひばりが丘を通り、さがみ野の旧大塚の宿場、大山のふもとの伊勢原を経て足柄峠に向かう街道。

博奕打ち

ちゃんと働かずに賭け事などで他人のお金を巻き上げる人。

日尾荆山（1789～1859）

埼玉県小鹿野出身。幼少より勉学に励み十五歳で寺子屋の師匠となり、江戸で儒学・国学を学び、塾を開いた。多くの門人を育て、数多くの著書を残した。（小鹿野町ホームページより抜粋要約）

踐を重んじて学び、このことがやがて誠に至る」という方針で、武士をはじめ町人、農民にも、儒学や国学、日本の歴史などを教えていました。

「そうだと至誠堂のように、栗原村に青少年たちが学ぶ学校を作り、村を立て直そう。」と弥市は学校の建設計画を思い立ちました。

しかし、文久元年（1861年）十一月、この五代目弥市は突然、五十七歳で亡くなりました。

七代目弥市、五代目の遺志を継ぐ

では、学校を作る計画は中断してしまっただけでしょうか。

五代目弥市には、三人の息子がいました。六代目だった長男は安政五年（1858年）に亡くなっていたので、次男が文久二年（1862年）に七代目を継ぎました。この七代目弥市こそ、父が計画した青少年のための「誠志館」という郷学校ごうがっこうを開校させた弥市なのです。それは父の五代目弥市の死後から

儒学
古代中国の様々な道德思想を中心にとめた学問です。

大矢家略系図

（五代目以降）

五代目

大矢 泰寿

文化元年（1804）
文久元年（1861）

六代目

大矢 泰春

天保元年（1830）
安政五年（1858）

七代目

大矢 泰臨

天保五年（1834）
大正二年（1913）

（『座問むかしむかし第十八集』大谷之彦著「大矢弥市について」より抜粋）

わずか三か月後のことでした。

「誠志館」の建設費や運営費は、全体の二分の一を七代目弥市が出し、弟の大矢弥七と栗原村の人々が四分の一ずつを負担し、村全体で協力して学校を作りました。さらに、授業で使う筆や紙は弥市と弥七が費用を負担し、生徒の授業料も無料でした。先生には日尾荆山のすぐれた弟子、日尾敬三郎を招き、寺子屋よりも上級の読み書きや、商売の規則、日本の歴史などを教え、特に道徳心を身につけるために、儒学を授業にとり入れました。

就学期間は五年、一年間の授業は一月から十二月、進級試験が二月と七月に行われました。先生は一名から三名、生徒は三十名くらいでした。

また、月の三日と八日は、道徳心の向上などを目的に村人への講義が行われ、時には江戸で学んだ経験を生かして弥市も教壇に立ったと伝えられています。

しかし、江戸時代の終りころには、強盗事件などがたびたびあって非常に危険になり、郷学校「誠志館」も廃校となりました。

新しい時代の中で

明治二年（1869年）、弥市と弥七の兄弟と村人たちによって、郷学校は「協同学舎」という名称で再興されます。

その後、学校の制度が変わり、明治六年（1873年）に新たに小学校として開校します。このころ、弥市も学区取締として、教育の運営に尽力しました。

明治十年（1877年）には、校名も「栗原学校」と変わりました。

そして、明治十二年（1879年）に、当時としては珍しい近代的な洋風の新校舎が、弥市と弥七の兄弟から建設費や木材の提供を受けて、専福寺の境内に完成しました。のちに、ここを訪れた山岡鉄舟



増改築された校舎と運動会の様子
(大正5年(1916年)頃)

学区取締

県に任命されて各学区の学校運営をまとめる公職。弥市が担当した学区は当時の行政区、第二十大区に含まれ、その範囲は高座郡北部の座間を入れた旧二十七か村でした。

は、落成記念に大きな文字で「栗原学校」と書いています。その後、「栗原学校」は名称が何回も変わりましたが、昭和二十五年（1950年）には「座間町立第二小学校」として、現在の場所に校舎が建設されました。さらに昭和四十八年（1973年）には「座間市立栗原小学校」となり、栗原の教育の伝統が現在に引き継がれています。

※ この文をまとめるにあたり、座間市教育研究所教育史前編集員大谷之彦氏にご助言をいただきました。また、取材をする中で弥市の子孫の皆さんから「困難に出会っても、あきらめないで前にすすんでゆく」という代々の弥市の心を表す言葉もいただきました。

【参考・引用文献】

座間市「目で見る座間」

座間市教育委員会 座間市史 2 近世資料編



山岡鉄舟
慶応四年（1868年）
四月（旧暦）の江戸城無血開城に貢献した旗本、幕臣、政治家、思想家。
剣・禅・書の達人。大筆で扁額へんがくに「栗原学校」の文字を書きました。扁額は市指定重要文化財。



座間市教育委員会 座間市史 5 通史編編(上)

座間市教育委員会 座間むかしむかし第八集「郷学校 誠志館」大谷之彦

座間市教育委員会 座間市教育史 年表篇

座間市教育委員会 座間市教育史 第一卷 近代資料編

座間市教育委員会 座間むかしむかし第十八集「大矢弥市について」大谷之彦

栗原小学校創立五十周年記念事業実行委員会 栗原小学校創立五十周年記念誌「は

たぐも」

横須賀市 新横須賀市史 通史編 近世

横須賀市 新横須賀市史 資料編 近世Ⅱ

【協力者等】

大矢恵子、大矢扶佐子

小鹿野町教育委員会 社会教育課

横須賀市総務部市史資料室

※敬称略